

認知症を身近なものにするためにできる取組は何か

静岡福祉大学社会福祉学部 檜木ゼミ

指導教員：教授 檜木博之

参加学生：牧野柚希・岩村隼成・小長谷歩実・

小林愛実・齊藤友夏・佐野心良・新谷佳奈・

曾根朱莉・榛村聖也・田中優衣・法月ひなた

・塚本翔太・原川壘

1 要約

御殿場市における認知症に関する市民のニーズを把握し、認知症に関する市の取組で必要なことを明らかにすることを目的として、認知症に関する先行研究レビュー、市保健師・地域包括支援センター職員へのヒヤリング、各地域の若年層への啓発の取組の確認等を行った。御殿場市では、認知症に関わることが少ない若い世代への啓発は課題となっている。今後は「新しい認知症観」を若い世代に啓発していく活動を行っていくことが必要である。

2 研究の目的

御殿場市では、認知症になっても住み慣れた地域で生活し続けることができるように、認知症の理解促進や本人・家族が暮らしやすい環境づくりを目指した施策展開をしている。しかし、事業への参加者が少ない、無関心層への情報発信ができていない等から、市民のニーズとのマッチングが十分でないと思われる。また、認知症が重度になって問題が表面化してから関係機関に相談が入り、本人・家族の望む生活が継続できなくなっている状況がある。

本研究は、御殿場市における認知症に関する市民のニーズを把握し、認知症に関する市の取組で必要なことを明らかにすることを目的とする。

3 研究の内容

- ①先行研究で先進的に行っている各市町村の取組を明らかにしていく。
- ②御殿場市での認知症の取組を確認し、現状の課題を明らかにしていく。
- ③御殿場市内地域包括支援センターにヒヤリング調査を行い、認知症に関する市民の意識を明らかにしていく。
- ④各市町村で若年層への認知症啓発の取組を確認し、市民への啓発方法を明らかにしていく。
- ⑤市民を巻き込みながら活動を行っている他市町村の取組を視察し、御殿場市で取り組めることを提言していく。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

- ①先行研究で先進的に行っている各市町村の取組を明らかにしていく。
- ②御殿場市での認知症の取組を確認し、現状の課題を明らかにしていく。
- ③御殿場市内地域包括支援センターにヒヤリング調査を行い、認知症に関する市民の意識を明らかにしていく。
- ④各市町村のアルツハイマー月間の取組を確認し、市民への啓発方法を明らかにしていく。
- ⑤市民を巻き込みながら活動を行っている他市町村の取組を視察し、御殿場市で取り組めることを提言していく。

(2) 実際の内容

- ① A 認知症に関する各地域の先行研究レビューを行った。
- ② A 御殿場市長寿福祉課職員にヒヤリングを行った。
- ③ A 御殿場市内地域包括支援センター1か所にヒヤリングを行った。
- ④ B アルツハイマー月間の取り組みではなく、各地域の若年層への啓発活動について調査した。
- ⑤ A 認知症カフェの運営を市民に切り替えていく活動を行っている地域にヒヤリング調査を行った。

(3) 実績・成果と課題

① 先行研究で先進的に行っている地域の取組

学生に対しての取り組みとして、認知症サポーター養成講座を受講した看護学生たちの学びとして、認知症その人の本来の姿と向き合う姿勢や、認知症の方々の行動や価値観を否定しないなど本人たちを尊重するような関わりや尊厳を守っていくこと等があげられた。また、学生が認知症カフェを実施した先行研究では、関係機関からの信頼を得てイベントへの参加依頼が増えるなど、地域の社会資源として定着しつつある。高齢者の居場所にとどまらず、子どもの学習支援を通じた多世代交流の場へと発展した点も大きな成果、と明らかにしていた。他にも、社会福祉、看護を学ぶ学生約40人で「オレンジパートナー実行委員会」を設立し、認知症に関するイベントを開催、映画「オレンジ・ランプ」の市民上映会を実施した、という報告があった。

認知症に優しい図書館の取り組みの先行研究では、認知症関連の図書の展示、市民講座、認知症ブックカフェの開催を通して、認知症の人や家族、市民を図書とつなぐことや正しい理解を促すこと、図書館を交流・社会参加の場とすることを目的に、多世代の人と関われる地域づくりを目指していることの報告があった。

認知症のイメージに関する調査の先行研究では、認知症のイメージについて、暴言暴力をふるう、何もできない、施設に入所させるといったイメージではないことがわかったが、自立的に地域で暮らしていくのか、サポートを受けながら地域で暮らしていくのか意見が分かれる結果となったことの報告があった。

② 御殿場市での認知症の取組

御殿場市長寿福祉課保健師にインタビューを行った。質問項目は、これまで市で行ってきた認知症対策、市での取り組みの強み、啓発活動を行う上での課題等であった。これまでの取り組みでは、「認知症サポーター養成講座」「認知症カフェ」「みくりや安心だねっと」「認知症月間の啓発活動」等である。

認知症サポーター養成講座では、「キャラバン・メイトが講師を務め、認知症に対する正しい理解の普及を継続的に行っている。地域にある居場所やサロンなどの集まりに出向き、出張講座形式で啓発活動を行っている。これにより、少人数から数十人の大人数まで、幅広い規模での啓発に対応している」とのことであった。

認知症カフェは「市内で4か所実施している。キャラバン・メイトが関わっているカフェ運営において、参加者の認知症の有無にかかわらず、一人ひとりのタイプに合わせた対応を心がけ、皆が楽しめるように内容を工夫し、気を配っている点が特徴で、参加者が話をじっくりしたい人、ワイワイやりたい人、脳トレをやりたい人など多様な中で、どうすれば全員が楽しめるかを常に検討している。これらの活動を通じて、キャラバン・メイトは認知症の基礎知識を普及させ、市民の理解を深める上で中心的な役割を担っている。

みくりや安心だねっとは、認知症による徘徊時に早期発見につなげるための取り組みとして、事前登録制で運営している。登録者が行方不明になった場合、協力隊員（多くは認知症サポーター養成講座を受けた市民）にメールで情報（顔写真や服装など）が配信されるようになっており、早期発見につなげている。

認知症月間の啓発活動は、市役所や図書館等で認知症啓発の展示ブースを設置し、市民が閲覧し、認知症の理解を広げるようにしている。今年度は認知症に関する映画上映会を実施した。また「広報ごてんば」にて認知症についての特集記事を掲載し、広く市民に周知を図った。

③御殿場市内地域包括支援センターへのヒヤリング調査

地域包括支援センターの職員で、認知症地域支援推進員1名にインタビューを行った。質問項目は、②と共通である。「認知症当事者の声を施策の起点」「新しい認知症観」「アウトリーチ活動」等についての話があった。「認知症当事者の声を施策の起点」では、「認知症施策を推進していくにあたって、認知症の人の声を起点とし、認知症の人や家族と共に推進していくことが基本に据えられている。地域住民の参加を促すには、まず当事者自身が声を上げやすい環境と機会を提供することが鍵となる。今年度の「広報ごてんば」にて、当事者の声を掲載した。認知症のある方々が自身の意見を政策に提言したり、委員として名乗りを上げたりすることが、今後の取り組みの大きな課題と認識されている」等の話があった。

「新しい認知症観」では、「認知症基本法が施行され、『認知症になったらおしまい』『何もかも終わってしまう』といった古い認知症観から、『認知症になっても自分らしく希望を持って暮らしを続けることができる』という新しい認知症観へ意識を変えていくことが、主体的な参加やオープンな活動を可能にする上で重要である。啓発活動では、新しい認知症観を市民に伝え、気づきを促すことが課題となっている」との話があった。

「アウトリーチ活動」では、「認知症カフェのような居場所づくりを通して、参加者に『楽しかった』『居心地がよかった』という思いを持ち帰ってもらうことを重視している。また、地域包括支援センターの存在を知らない市民がいる現状に対しても、広報誌の発行やスーパーでの相談会、居場所への出前講座などを通じた地道なアウトリーチ活動を継続していく予定」との話があった。

写真①地域包括支援センター職員へのヒヤリング 写真②認知症啓発活動の手伝い



④各市町村で若年層への認知症啓発の取組

熊本県では、小学生たちにも認知症について正しく理解してもらうために事例形式のパンフレット『おやこでまなぶ認知症』が作成されていた。パンフレットの他にも、認知症とはどのような症状であるのか、その時にどのような行動を取ればよいのかを学ぶことができる動画やクイズも作られていた。

茨城県水戸市では、遊んで学んでみんなで支える「認知症すごろく」という活動が行われており、認知症の進行に応じた症状とともに、「もも上げ体操」や「脳トレ」などをマス目に配置し、体や頭を働かせて楽しみながら認知症を学べるように構成されていた。

日本福祉大学では、すごろくをベースにしたゲームが作られた。マスには、認知症に関

連する生活上の出来事や問題が書かれていて、マス外には、その出来事や問題に関する話し合いを促しや、用語説明が書かれている。大阪府枚方市では、認知症すごろくがある。認知症の進行に合わせた症状の事例や、活用できる社会資源、予防のための対策などをゲーム感覚で楽しみながら学べるものになっていた。

東京・板橋区の「いたばし認地笑かるた」や墨田区の「すみだオレンジかるた」等を活用して、子どもから高齢者まで楽しみながら認知症の知識や見守りのポイントを学べる工夫がされており、地域住民の理解促進と交流のきっかけとなっている。

⑤認知症カフェの運営を市民に切り替えていく活動を行っている地域へのヒヤリング

健康科学大学の教員が立ち上げた認知症カフェの主体を市民に移行している取り組みについて、主催者（大学教員）にヒヤリングを行った。「主体を市民に移行していくために、参加の段階から運営に携わってもらい、当事者意識をもつようにしていく、当事者の意見を取り入れて活動していく、等があげられた。課題としては、継続的な運営を行っていくこと」等の話があった。

(4) 今後の改善点や対策

御殿場市ではこれまで認知症サポーター養成講座や認知症カフェ、みくりや安心だねつと、認知症月間の啓発活動等を行い、市民への認知症への周知を行っている。しかし、認知症に関わることが少ない若い世代への啓発は課題となっている。今後は「新しい認知症観」を若い世代に啓発していく活動を行っていくことが必要と考える。

5 課題提出者・地域への提言

地域への提言として、若い世代への啓発の具体的方法として以下の方法を挙げたい。①若い世代を対象とした認知症の理解を促すリーフレットの作成、②認知症カフェに学生等の若い世代も参加した多世代交流の実施、③認知症月間での啓発活動において若い世代にも伝えるコンテンツを含める等が考えられる。これらの活動に学生も参加し、認知症について若い世代への啓発を行い、現在の課題である無関心層への情報発信ができていないことが解消できることが期待される。

6 課題提出者・地域からの評価

市民へ「新しい認知症観」を効果的に周知・啓発をするにあたり、大変参考になった。学生のアイデアを活用することで、若い世代や無関心層へ情報発信ができると期待している。今後、リーフレットの作成や多世代交流、コンテンツの作成などにも若い力を取り入れ、協働して作り上げることで、情報発信力の強化、さらにはニーズに合わせた施策展開へと繋げていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 「本学における認知症サポーター養成講座を受講した看護学生の学びの活用 -臨地実習・地域での活用に焦点を当てて-」 武田智美、又吉忍、川島一晃、早川 幸博 (2023) 椙山女学園大学看護学研究 Vol.15 43-53
- 2) 「認知症カフェを立ち上げて3年間の活動 ～オレンジカフェ身延山の活動報告～」 檜木博之 (2020) 身延山大学仏教学部紀要第21号 31-41
- 3) 「認知症の理解啓発に関する活動報告」 堀川涼子 (2025) 地域生活科学研究所所報(2) 1) 54-56
- 4) 「認知症の人と向き合い、図書館員としてなにをすべきか—川崎市立宮前図書館の『認知症の人にやさしい小さな本棚』の取り組みを通じた多職種連携・市民協働の実践」 舟田 彰 (2021) 認知症ケアジャーナル2021vol.14 173-182